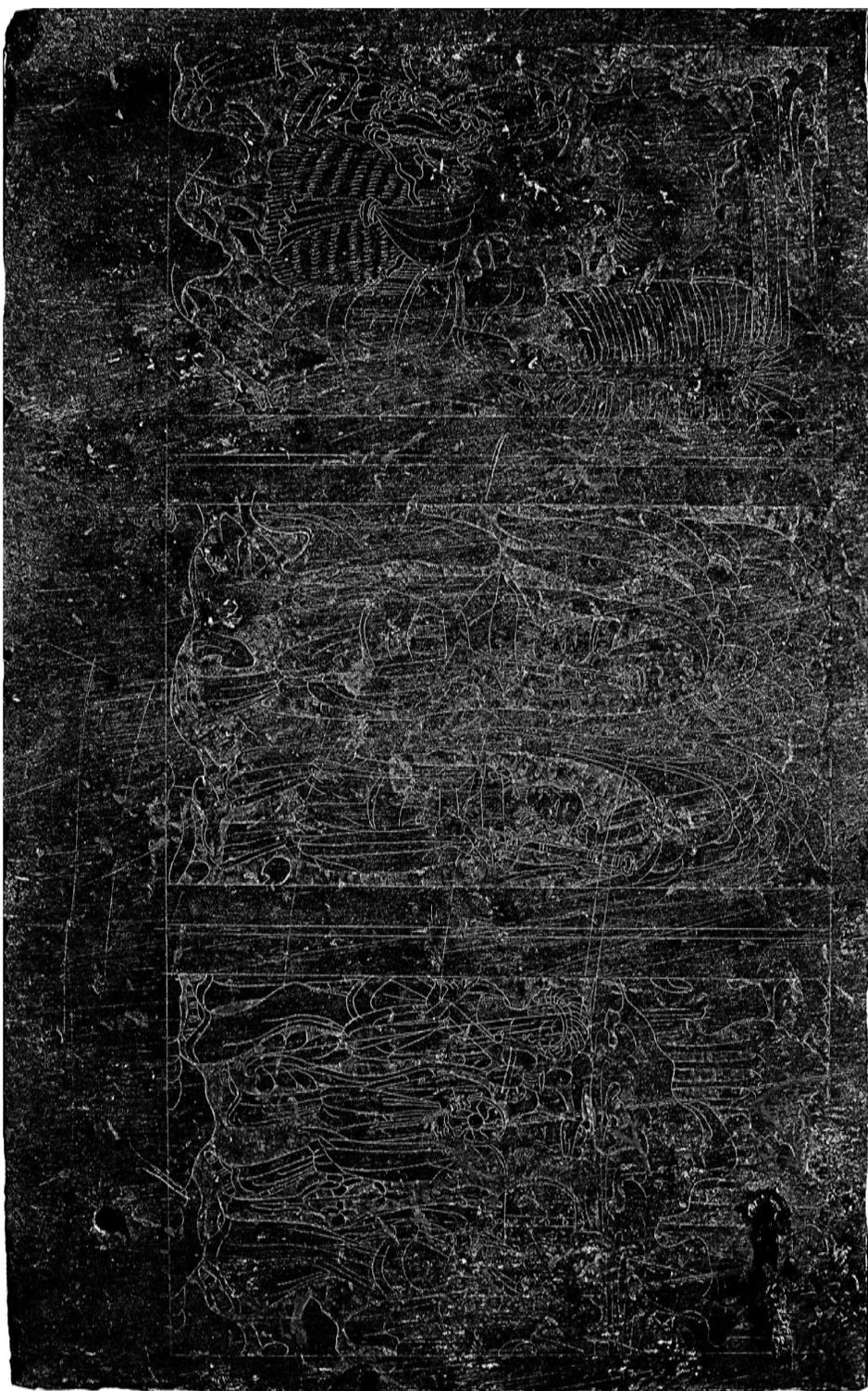
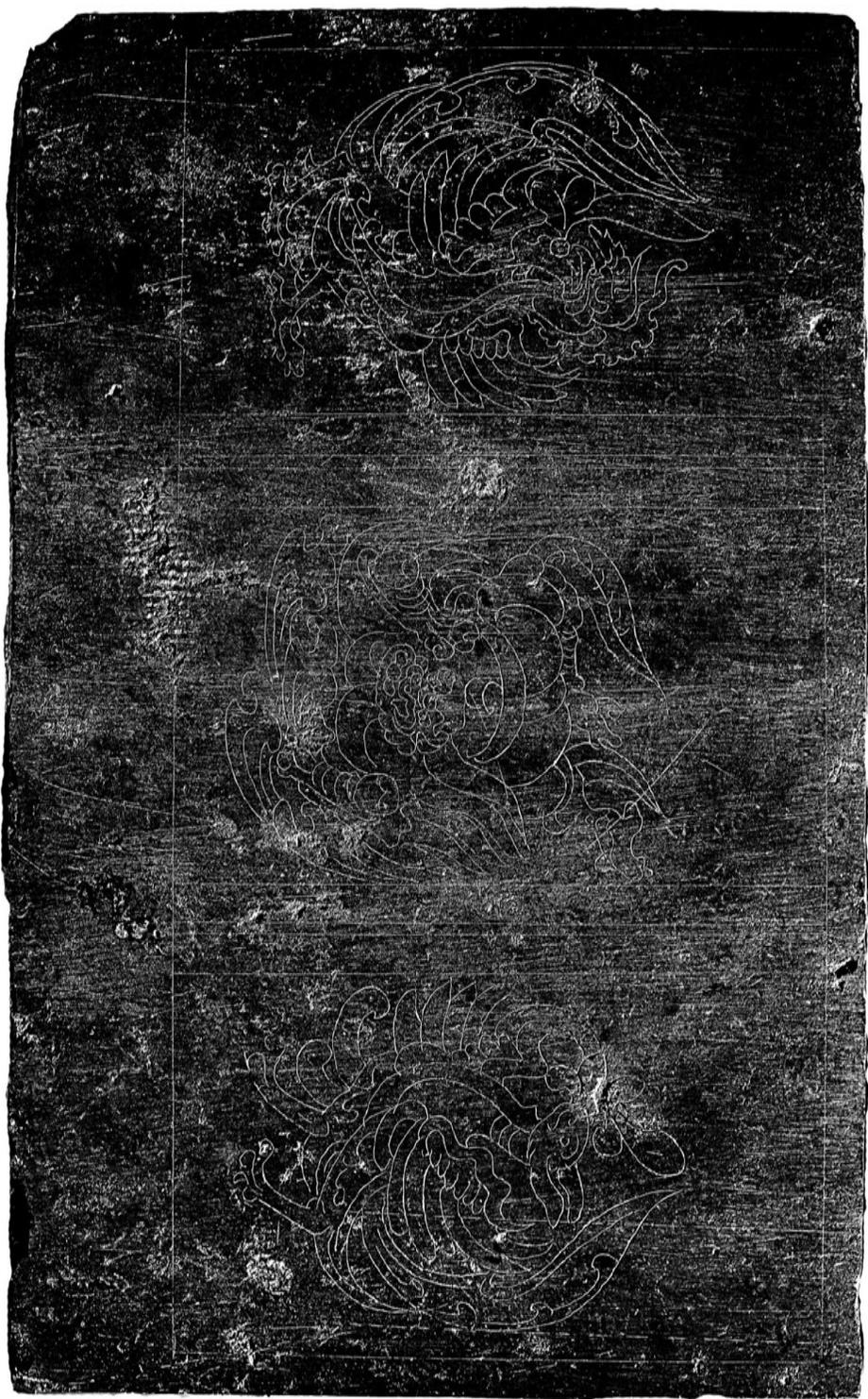


图版一 吴氏藏董黯石床 右侧版(表)



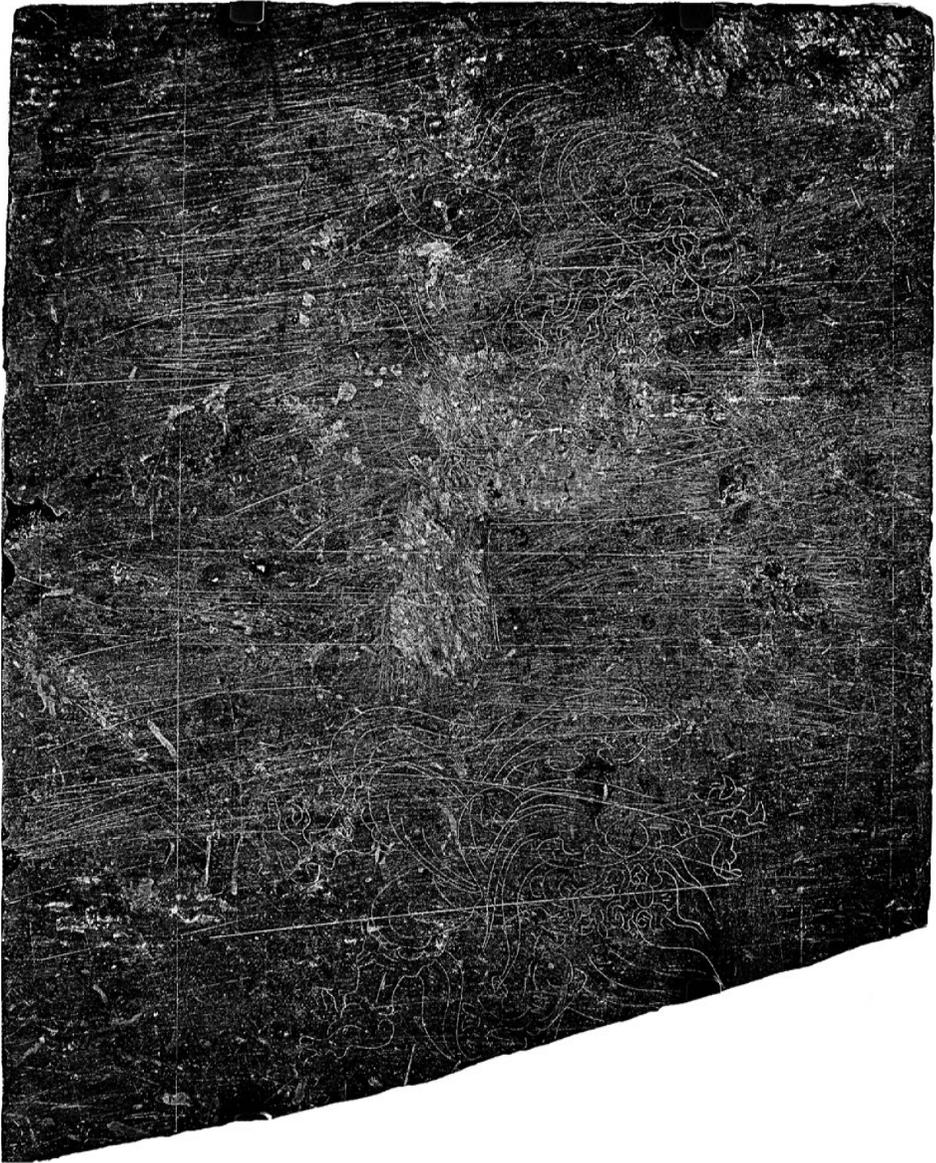
图版二 吴氏藏董黯石朱 右侧版(裏)



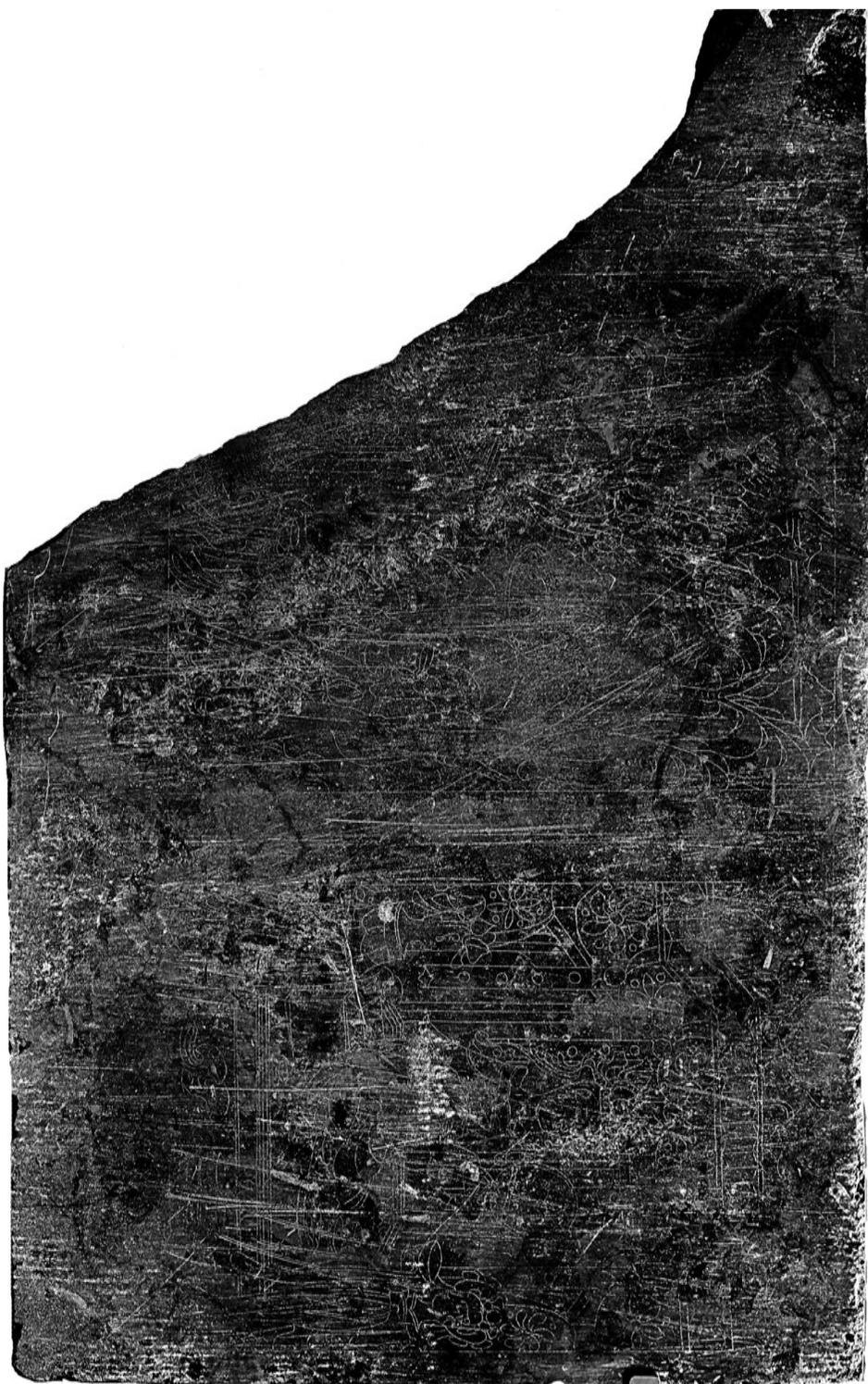


图版三 吴氏藏董黯石床 正面石板(表)

图版四 吴氏藏董髹石床 正面古板(裏)

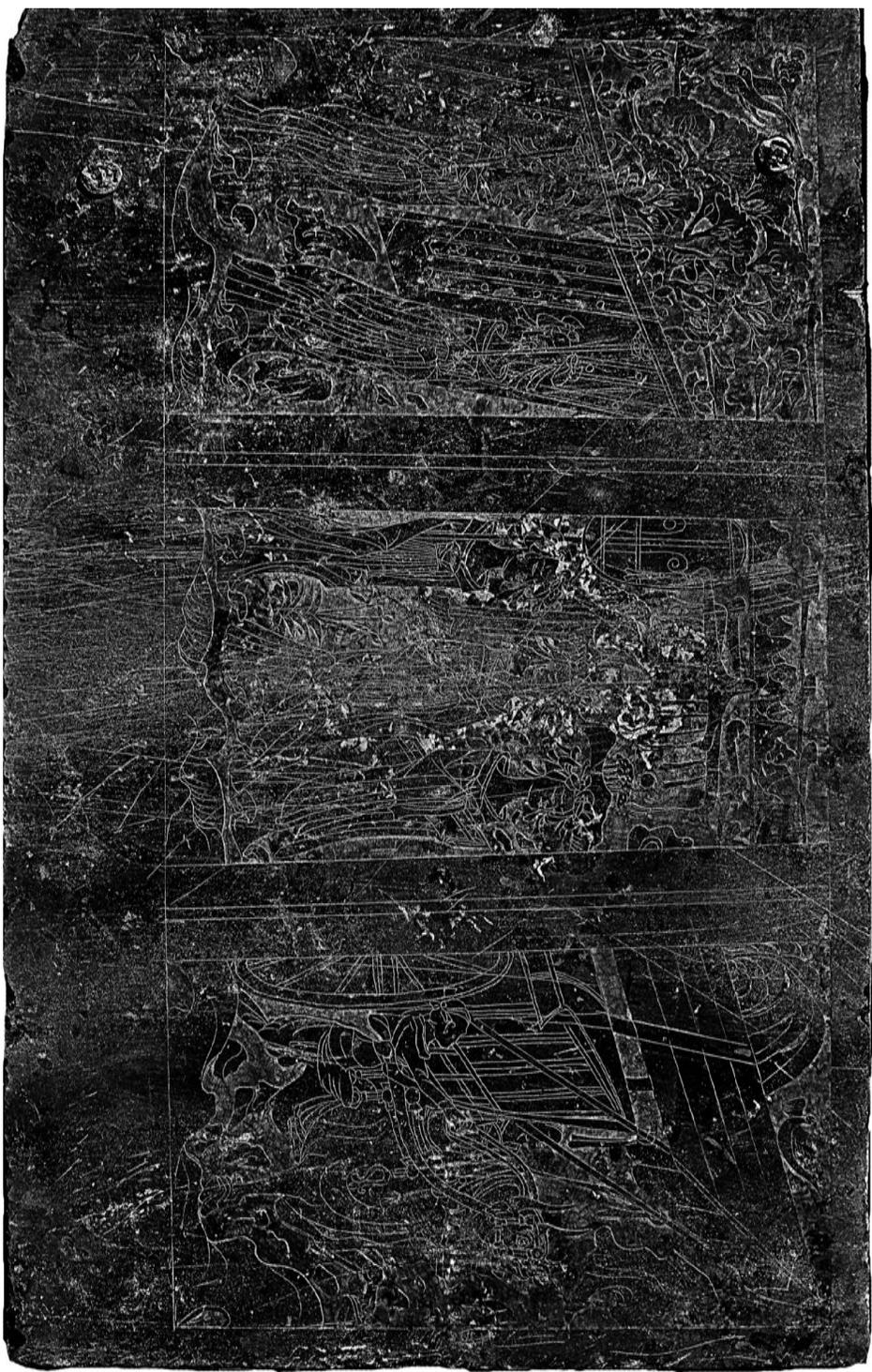


图版五 吴氏藏董黯石床 正面左板(表)



图版六 吴氏藏董黯石床 正面左板(裏)





图版七 吴氏藏董黯石床 左侧版(表)

图版八 吴氏藏董黯石床 左侧版(裏)



董黯図攷(二)

——吳氏藏董黯石床の出現——

黒田 彰

〔抄録〕

小稿は、拙稿「董黯図攷—吳氏藏北魏石床(二面)の孝子伝図について—」(本誌100号、平成28年3月)を継ぐもので、董黯の物語を描いた、新出の吳氏藏北魏石床二点の図像を紹介し、考察を試みる。その内の一点の孝子伝図は、董黯のみを描いた、極めて珍しい遺品となっており(董黯石床と仮称する)、小稿では、吳氏の好意によつてまずその全図像を、世界に先駆け公表する。また、本石床には、非常に貴重な二つの題記が刻されていること

など、北魏時代の董黯図の成立と展開を知る上で、本石床の有する、高い学術的価値を具体的に論じる。もう一点の吳氏藏新出北魏石床の全貌については、機会を改めて紹介したい。

キーワード

董黯とうあん図、孝子伝こうしでん図、孝子伝こうしでん(陽明本孝子伝)、

石床せきしょう(石棺床せきかんしょう)、ボストン美術館藏北魏石室、

ネルソン・アトキンズ美術館藏北齊石床

—

平成二十九(二〇一七)年九月末、深圳市金石芸術博物館を訪れた。理事長吳強華氏の招きによるもので、今般吳氏が新たに入手された孝子伝図石床二点を調査するためである。一見して驚いたことは、今回の遺品二点には共に董黯図が含まれていたことである。いざれ劣らぬ珍しい遺品だが、取り分けその内の一点は、孝子伝図としての董黯図

研究史にとつて、極めて重要なものと思しい。吳氏がお許し下さったので、今般の新出孝子伝図石床二点については、順次報告してゆきたいと思うが、ここでは、仮に董黯石床と仮称する、新出の孝子伝図石床の全貌を紹介すると共に、董黯石床及び、もう一点のそれに含まれる、董黯図の問題を論じてみたい。

巻頭の図版一—八に掲げたのは、董黯石床囲屏四枚の表裏、計八枚の原石写真である(写真家、立松洋行氏の撮影による)。以下の写真も

同じ)。董黯石床は、裏面にも図像(畏獣と風俗)を伴う(図版二、四、六、八)、囲屏石板四枚から成る、北魏末期の優品で(脚部〈前脚、後脚〉も具わる)、囲屏一枚を表裏共、三つに区切つて、それぞれに線刻の図像を描く。その法量は、

右側板——縦五二・六、横八六、厚五・六糶

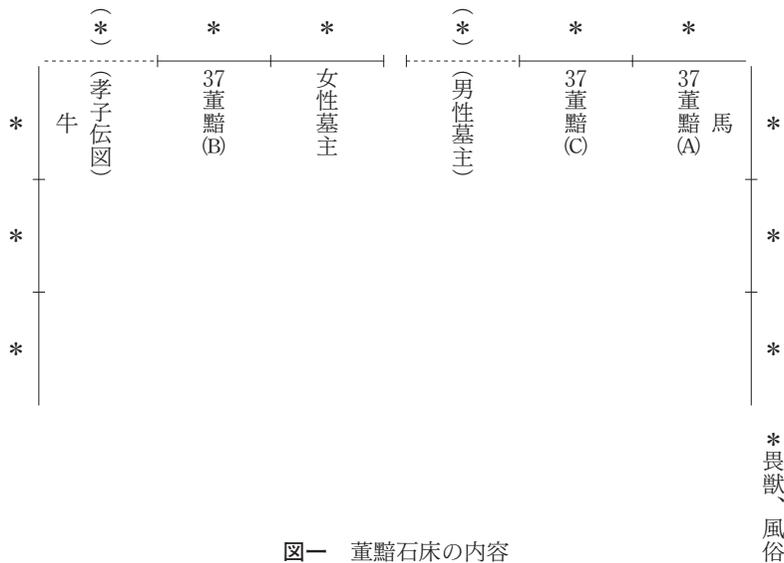
正面右板——縦五二・六、横五三〇六六、厚五糶

正面左板——縦五二・八、横八五・六〇五一、厚四・八糶

左側板——縦五二・四、横八一・五、厚四・四糶

となつている。孝子伝図が存するのは、表面(図版一、三、五、七)の内の正面右板(図版三)の右と中、正面左板(図版五)の中(左欠)である。今、その内容を概念図として示せば、図一のようなになる(空白部は侍者図。孝子名の上のアラビア数字は、陽明本孝子伝の条数を表わす)。さて、現行の董黯石床には、遺憾なことながら正面右板、正面左板の左側に、いずれも三分の一程の欠損がある(図版三、四及び、図版五、六)。図一の……線部がそれに当たり、正面右板左の男性墓主像(また、裏面の畏獣、風俗図)及び、正面左板左の孝子伝図(また、裏面の畏獣、風俗図)が失われているものと考えられる。小稿は、新出董黯石床に描かれた董黯図の、孝子伝図研究における学術的意義を、明らかにしようとするものである。

董黯石床の正面右板表(図版三)の右、中には董黯図(A)、(C)が描かれ(左の男性墓主像は欠)、正面左板表(図版五)の中には董黯図(B)が描かれていて(左の孝子伝図は欠)、本石床の現存する孝子伝図は、全て董黯図によつて占められることになる。本石床を董黯石床と仮称



図一 董黯石床の内容

する所以である。本石床の孝子伝凶の基づいた董黯物語を、陽明本孝子伝37董黯条によつて示せば、次の通りである（末尾に書下し文を添える）。

陽明本

①董黯家貧至孝。雖与王奇並居、二母不数相見。忽会籬辺。因語曰黯母、汝年過七十、家又貧。顔色乃得怡悦如此何。答曰、我雖貧食完鹿衣薄、而我子与人无惡。不使吾憂故耳。王奇母曰、吾家雖富食魚又嗜饌、吾子不孝、多与人恐。懼罹其罪。是以枯悴耳。於是各還。奇從外婦。其母語奇曰、汝不孝也。吾問見董黯母、年過七十、顔色怡悦。猶其子与人无惡故耳。奇大怒。即往黯母家、罵云、何故讒言我不孝也。又以脚蹴之。婦謂母曰、兒已問黯母。其云、日々食三斗。阿母自不能食、導兒不孝。黯在田中、忽然心痛、馳奔而還。又見母顔色慘々、長跪問母曰、何所不和。母曰、老人言多過矣。黯已知之。於是王奇日殺三牲、且起取肥牛一頭殺之、取佳完十斤、精米一斗熟而薦之。日中又殺肥羊一頭。佳完十斤、精米一斗熟而薦之。夕又殺肥猪一頭。佳完十斤、精米一斗熟而薦之。便語母曰、食此令尽。若不尽者、我当用鉞刺母心、用戟鉤母頭。得此言終不能食、推盤擲地。故孝経云、雖日用三牲養、猶為不孝也。黯母八十而亡。葬送礼畢、乃嘆曰、父母讐不共戴天。便至奇家斫奇頭、以祭母墓。須臾監司到縛黯。々乃請以向墓別母。監司許之。至墓啓母曰、王奇横苦阿母。黯承天土、忘行己力、既得傷讐身。甘洎醢、甘監司見縛。应当備死。拳声哭。目中出血。飛鳥翳日、禽鳥悲鳴。或上黯臂、或上頭辺。監司具如状奏王。々

聞之嘆曰、敬謝孝子董黯。朕寡徳統荷万機。而今凶人勃逆。又庇治剪、令勞孝子助朕除患。賜金百斤、加其孝名也。

①董黯家貧しくして至孝なり。王奇と並び居ると雖も、二母相見ること数ならず。忽ちに籬辺に会す。因りて黯が母に語りて曰わく、汝年七十に過ぎ、家も又貧し。顔色乃ち怡悦を得ること此くの如きは何ぞやと。答えて曰わく、我貧しく完を食し鹿衣薄しと雖も、我が子人の与に悪無し。吾をして憂えしめざる故のみと。王奇が母曰わく、吾家富み魚を食し又饌を嗜むと雖も、吾が子不孝にして、多く人の与に恐れらる。其の罪に罹るを懼る。是を以つて枯悴するのみと。是に於いて各還る。奇外より帰る。其の母奇に語りて曰わく、汝不孝なり。吾董黯が母を問見するに、年七十を過ぐれども、顔色怡悦す。猶其の子人の与に悪无き故のみと。奇大いに怒る。即ち黯が母の家に往き、罵りて云わく、何の故に我が不孝を讒言するやと。又脚を以つて之を蹴る。婦りて母に謂いて曰わく、兒已に黯が母に問う。其れの云わく、日々三斗を食すと。阿母自ら食すること能わずして、兒が不孝を導うと。黯田中に在り、忽然として心痛み、馳奔して還る。又母の顔色慘々たるを見て、長跪して母に問いて曰わく、何の所か和ならざると。母曰わく、老人の言過ち多しと。黯已に之を知る。是に於いて王奇日に三牲を殺す。且に起き肥牛一頭を取りて之を殺し、佳き完十斤を取り、精米一斗熟して之を薦む。日中又肥羊一頭を殺す。佳き完十斤、精米一斗熟して之を薦む。夕に又肥猪一頭を殺す。佳き完十斤、精米一斗熟して之を薦む。便ち母に語りて曰

わく、此れを食し尽くさしめん。若し尽くさざらば、我当に鉞を用つて母が心を刺し、戟を用つて母が頭を鉤くべしと。此の言を得て終に食すること能わずして、盤を推して地に擲つ。故に孝経に云わく、日に三牲の養を用うと雖も、猶不孝と為すなりと。黯の母八十にして亡す。葬送の礼畢り、乃ち嘆じて曰わく、父母が讐、共に天を戴かずと。便ち奇が家に至り奇の頭を斫り、以つて母の墓に祭る。須臾にして監司到りて黯を縛す。黯乃ち請うに墓に向かい母に別れんことを以つてす。監司之を許す。墓に至り母に啓して曰わく、王奇横に阿母を苦しむ。黯天を承くる士なれど、己が力を行方を忘れ、既に讐身を傷することを得たり。泣醢に甘んじ、監司に縛せられんことに甘んず。応当に死に備うべしと。声を挙げて哭く。目中より出血す。飛鳥目を翳い、禽鳥悲鳴す。或いは黯の臂に上り、或いは頭辺に上る。監司具に状の如くに王に奏す。王之を聞きて嘆じて曰わく、孝子董黯を敬謝す。朕寡徳にして万機を統べ荷う。而れども今凶人勃り逆らう。又庇に治剪し、孝子の朕が患いを除くを助くることを勞わしむべしと。金百斤を賜うて、其の孝名に加うるなり

右の物語を踏まえて描かれたと思しい、孝子伝図の董黯図として目下、管見に入つたものに、左の九点がある(今般新出の二点を、(8)(9)に加えた)。

- (1) ポストン美術館蔵北魏石室(右側下)
- (2) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床(正面左板)
- (3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺(左幫)

(4) 呉氏蔵北魏石床(正面左板左)

(5) 呉氏蔵東魏武定元(五四三)年翟門生石床(右側板左)

(6) ヴァージニア美術館蔵北魏石床(正面左板中央)

(7) 呉氏蔵北魏石床(三面)(右側板)

(8) 呉氏蔵董黯石床(正面右板右、中、同左板中)

(9) 呉氏蔵新出北魏石床(左側板)

ところで、孝子伝図の董黯図に関しては、かつて次の四論攷において考察を試みたことがある。

- I 「董黯贅語―孝道と復讐(一)―」(拙著『孝子伝図の研究』II-1-3)
 - II 「呉氏蔵北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用―」(『京都語文』24)
 - III 「董黯図攷―呉氏蔵北魏石床(二面)の孝子伝図について―」(『佛敎大学文学部論集』100)
 - IV 「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」(『佛敎大学文学部論集』102)
- 小稿にあつては、右の四論攷を受けつつ、なるべくそれらとの論旨の重複を避け、新出(8)董黯石床の有する學術的価値というものを、出来る限り具体的に論じてみたい。
- 董黯の図像(1)―(9)の内、(1)―(7)については、上記拙稿I―IVにおいて、既に紹介したことがある。そこで、次に新出の董黯図(8)(9)を紹介しよう。

図二は、新出の(8)呉氏藏董黯石床、正面右板右、中に描かれた董黯図(A)(C)を示したものである。まず(A)は、画面の中央やや左寄りに題記があり、

董黯(黯)辞母遠行去時

と記される(黯の音は、アン。黯の宛て手)。(A)の画面左には、董黯の家が描かれ、その屋内には、黯の母が坐している(右向き)。その右には、母に対し、拱手して立つ董黯が描かれる(左向き)。黯の右に、同じく拱手して立つのは、侍女である。次いで、(C)にも、ほぼ同様の位置に、

董黯(黯)将王奇頭祭母報酬末時

なる題記が刻されている。(C)の画面左下には、まず黯母の墓(の一部)が見え、その墓に向かって跪くのは、董黯である(左向き)。黯は、冠を被り、亡母に供物を捧げている。墓前の丸い盆の上に供えられるのは、王奇の首に外ならない。黯の背後に立って、傘を差し掛けているのは、「監司」(陽明本。刺史のこと。船橋本「官司」)であろう。さて、画面左下の墓の右には、一匹の虎が描かれ(左向き)、黯の方向を振り返っており、さらに虎の上には、雷神(の一部)が描かれているが、このことは後述する。

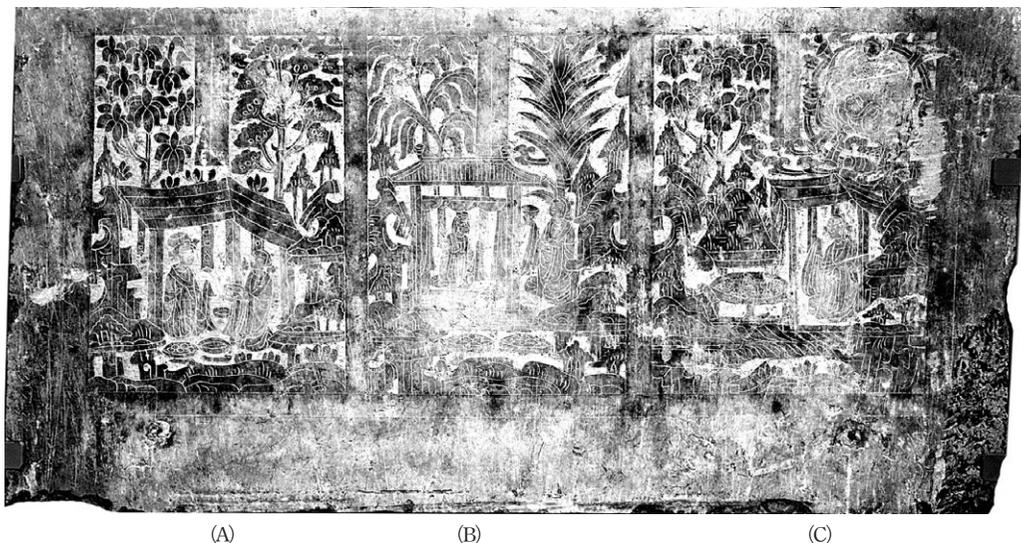
図三は、(9)の呉氏藏新出北魏石床左側板の三面に描かれた、董黯図(A)(B)(C)を示したものである。(A)(B)(C)のそれぞれ中央上部に、二行分の榜が置かれるが、榜題題記は見えず、おそらく消失したものでだろう



(C)

(A)

図二 董黯石床正面右板



図三 呉氏蔵新出北魏石床(董黯)

(呉氏談)。まず三面全てに家が描かれている。それらの内、(A)(C)の家が董黯の家であり、(B)の家が王奇の家であろうことは、屋根の形の違いから分かる。黯の家は簡略で、奇の家は豪華である。(A)は、その屋内の左に黯母が坐し(右向き)、右に黯が跪いて、母に食物を捧げている(左向き)。(B)は、屋内に奇母が坐し(右向き)、その右の屋外に奇が跪く(左向き)。奇も右手に食器を掲げている。(A)の黯母が若々しく、ふつくらとした顔立ちに描かれているのに対し、(B)の奇母は年老い、痩せた顔立ちとなっていることが面白い。ところが、(A)に描かれた食物が小さく、少ないのに対し、(B)のそれが大きく、沢山であることは、図三の(A)(B)が董黯の物語を、忠実に反映していることと表われと捉えられ、(B)の王奇(右)が、(A)の痩せた董黯に比べ、丸やかな堂々とした姿(腹も出ている)に描き分けられていることも、同様の事情によるものと考えられる。(C)は、まず画面左に、黯母の墓(塚)が描かれる。その右の屋内(庵か)に黯が跪く(左向き)。黯が右袖を顔の前へ掲げているのは、嘆きの様の表現である。さて、黯の前、墓の下には、丸い盆(三本の足が見える)に盛られた三牲(右から鶏、羊、豕)が描かれている(前掲拙稿Ⅳの二参照)。また、画面の右上には、雷神も描かれているが、これらのことも後述に従う。

さて、孝子伝図研究における、新出(8)の董黯図の学術的価値を知るためには、これまでに知られる董黯の図像(1)―(7)と新出(8)との関係を押まえておく必要がある。そこで、董黯図(1)―(9)が画材とした、孝子伝本文との対応を、上掲陽明本孝子伝37董黯条の中に、①―⑤で示し(①―⑤は、対応本文の始まる位置を表わす)、図像的特徴からそれ

らを仮に、

- ① 黯の家、奇の家（プロローグ）
- ② 黯母暴行
- ③ 黯の遠行
- ④ 三牲強要
- ⑤ 黯の墓参（大団円）

と名付ける。そして、孝子伝本文に基づく①―⑤と、(1)―(9)の董黯図の各場面との対応を一覧として示せば、表一のようなになるであろう^①。(8)の1は正面右板、2は正面左板を表わす。表二も同じ)。表一は、言わば孝子伝本文のストーリー展開に則つて、(1)―(9)の場面を分類、整理してみたものだが、その表一に基づき、さらに遺品毎の各場面を一覧として纏め直せば、表二のようになる。表二を見れば、(1)―(9)の董黯図が、①―⑤のどのような場面を有しているか、ということが判然とする。中で、北魏時代の董黯図を代表しているのは、王奇による、

表一 董黯図場面一覧

① 黯の家、奇の家 (プロローグ)	(1)、(2)左、中、(7)*右、中、(9)左、中
② 黯母暴行	(7)左下
③ 黯の遠行	(7)左上、(8)1右
④ 三牲強要	(1)左、(2)中、(4)、(5)、(6)、(8)2右
⑤ 黯の墓参 (大団円)	(2)右、(8)1左、(9)右

*奇の家のみ

母への三牲強要を内容とする④であり、(1)(2)と(4)(5)(6)及び、(8)の六つが、その④を描いている。(4)(5)(6)の董黯図は、④のみの一場面しか存しないが、問題は、①黯の家、奇の家という、物語のプロローグを描く、(1)と(2)とが、①の奇の家に④の三牲強要を、重ね描いていることである。この事実を証明するのが、今般出現した(9)の①を内容とする左、中で(図三参照)、その奇の家(中)には、④の三牲が描かれていない。その点、新出(9)の左、中は、董黯図における①黯の家、奇の家(プロローグ)の原初的な図像形態を示す、極めて貴重な資料としなければならぬ。このことから、(1)と(2)の④三牲強要の場面(1)左、(2)中は、①のプロローグ中の奇の家へ、便宜的に④三牲強要の場面を重ね、④の内容を兼ねさせたものと推測することが出来る。なお(7)右、左の①は、共に奇の家らしく、変則的である。また、(7)左上には、③黯の遠行として、まず左に田で耕している董黯、次いで右に「馳奔而還」(陽明本)の董黯という、二つの場面が描かれるなど、複雑な技巧が凝らされる(上記拙稿III参照)。その下に描かれた、②黯母暴行との関係で言えば、②③の順序は、陽明本の叙述の順序に従ったものだが、③黯の遠行は解釈上、②黯母暴行に先立たねばならず、(7)左の③の二場面が上にあり、②が下にあるのは、その解釈に基づく処置だろう(例えば敦煌本事森、類林雜説の本文はへ上記拙稿III注(8)参照、③②の順序となっている)。

私の董黯図に対する関心は丁度、十五年前に書いた「董黯贅語」を起点とする(拙稿I)。董黯図と言えば当時、在米国の(1)(2)(3)の三点

しか知られていなかった。四点目となる呉氏蔵(4)を知るのは、その十年後の平成二十四(二〇一二年)のことである。拙稿Iにおいて私が考えたのは、(2)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床、正面左板左中、右の三図が、全て董黯図と見做せるということだった。即ち、左板全体を董黯の三連図と捉えたのである。左板の中央図には、「不孝王寄」^(奇)の榜題が記されているので、それが董黯図であることは、疑いを挿む余地がなかったが、左が①黯の家であり、右が⑤黯の墓参(大団円)の場面であることは、孝子伝の本文から、そのように推定し得るものの、飽くまで推測の域を出なかった。尤も、右が黯の家であることには、それなりの根拠があつて、一つは、(1)ポストン美術館蔵北魏石室のそれに黯家、奇家の二つの家が描かれていることと、(2)の左中とが構造的に酷似していることであり、もう一つは、(1)の題記に、「董晏母供王寄母」^(奇)「語時」という題記が記され、その題記が、陽明本孝子伝の、「董黯家貧至孝。雖与王奇並居、二母不教相見。忽云籬辺。因語曰黯母……答曰……奇母曰……於是各還」に基づくもので、(1)の図像が董黯物語の①プロローグとしての黯の家、奇の家を描いたものと考えて、間違いなかったことである。当該図像の内容を同定するに際し、榜題題記の存在が図像以上に重要となることは、屢々経験する所である。(1)の題記こそは、董黯図①プロローグの図像内容を推定する上で、非常に重要な根拠を提供するものだった。ところが、(2)右の⑤黯の墓参(大団円)の場面は、聊か状況が異なる。即ち、(2)左、中の場面と違って、そこには(1)の題記のような根拠もなく、ただ推測するしか手立てがなかったのである。そして、その推測から

十五年を経て、漸く見出だされたのが、上掲題記を伴う新出(8)1中及び、(9)右の⑤黯の墓参(大団円)の両場面に外ならず、このことは後程、さらに詳しく説明しよう。

表二を見ると、(8)董黯石床の出現により、新たに見出だされた董黯図の場面としては、上述⑤黯の墓参(大団円)場面(9)右にも)の他、③黯の遠行の場面上げることが出来る。図四は、(8)1右の董黯図を示したものである。図四の図柄は、前述の如く、屋内に坐す黯母(左)に向かって、董黯と侍女(右)が立つ、至ってシンプルなもので、図柄だけを見れば、単なる供養図と見ることも可能な、分かり易い図像だが、問題は、図四に、



図四 董黯石床(A)

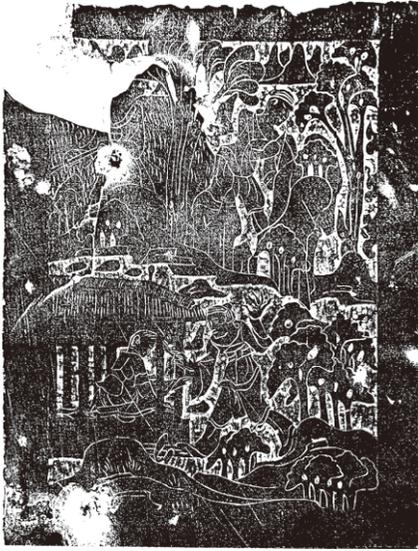
図五 董黯石床(A)題記



董黯^(黯)辭母遠行去時

なる題記が記されることである(図五)。何故なら、この題記が存することにより、図三は、単なる董黯の供養図などでなく、物語の展開に従って、黯が一旦家を出、母と共にはいなくなる、情景を明示するものとなるからである(陽明本孝子伝③参照)つまり図四は、③黯の遠行を表現した図像であり、図五の題記こそが、そのことを明証する。

(8)の右と同様、③黯の遠行を描くものは、(1)―(9)の内にもう一つあって、それが(7)呉氏藏北魏石床(三面)右側板左の上である。図六は、



図六 呉氏藏北魏石床(三面)右側板左

その右側板左を掲げたもので、図六の上が③黯の遠行、下が②黯母暴行を描く(上記拙稿Ⅲ参照)。さて、同じ③黯の遠行を内容とする図像ながら、図四(8)と図六(7)との二図の関係は、一体どうなっているのだろうか。さて、図六の上は、二つの図に分かれている。まず図六上の左の図は、董黯が田で耕している図である(陽明本孝子伝の③に、「黯在田中」とする記述に該当する)。次いで、董黯が家を留守にするのを窺っていた王奇は(敦煌本事森に、「專伺候董黯出外」、類林雜説に、「候黯不在」とある)、好機到来とばかり、董黯の家に押し入って、黯母に殴る蹴るの暴行を加えた(陽明本②参照)。それが図六下の図像である(②黯母暴行の場面に当たる)。すると、田中に在った董黯は、俄に胸騒ぎを覚え(陽明本「黯忽然心痛」、走って家に帰る(同「馳奔而還」)。それが図六上、右の図像である。このように図六の図像内容を辿り直してみると、(8)の図四と(7)の図六との関係は、図四の題記に、「董黯^(黯)辭母遠行去時」と明記されていることを理由として、図四は、董黯が耕作のため、家を留守にして外出しようとし、そのことを母に告げている場面であること、つまり図四は、図六上に先立つ場面であって、図四は、図六上の左の場面即ち、董黯が田で耕す場面へと、直ちに接続するものであることが知られる。換言すれば、(8)の図四と(7)の図六上とは、共に一連の場面として、③黯の遠行の諸場面を形成していることが判然とするのである。中で、図四の図像が、③黯の遠行場面において図六の上の二場面に前接すべき、従来全く知られることのなかった、董黯と母の別れを描く、新しい一場面の出現を意味している点は、研究史的に特筆すべき事実と言

わなければならぬ。ところで、翻つて考えてみるに、(7)呉氏蔵北魏石床(三面)の右側板左の上(図六上)こそは、当時始めて出現した、③黯の遠行の図像に外ならなかった(上記拙稿Ⅲ)。しかし、(7)には一切、榜題題記が存しないため、前述(2)の右の⑤黯の墓参(大団円)のケース同様、例えば図六の上の③黯の遠行図を解釈するに際しては、陽明本孝子伝の本文を頼りに、只管推測を重ねるしか、方法がなかった訳である。ところが、今般、

董黯辞^題母遠行去時

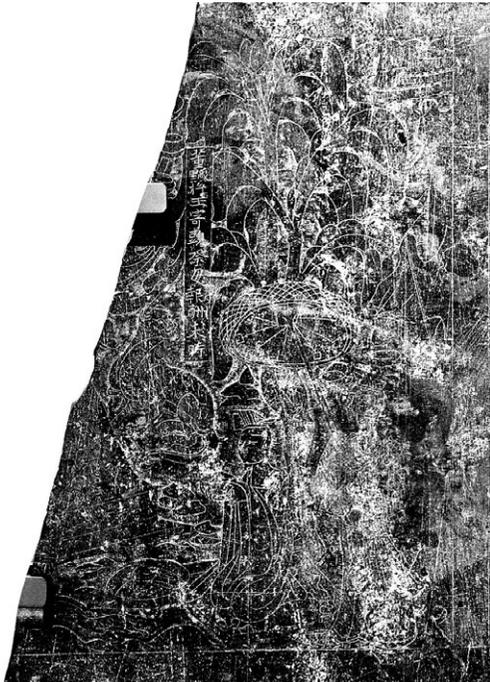
という題記を有する、董黯図の新資料(8)が出現した。その(8)が出現したことの研究的意義は、甚だ大きい。何故なら、図六上(7)によって推測される、董黯図における③黯の遠行図というものの存在が、図四の題記(図五)の出現により、事実として確証を得、且つ、根拠付けられたことになるからである。

三

(7)における③黯の遠行図(図六上)と全く同じ研究状況にあったのが、(2)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床、正面左板の右に描かれた、⑤黯の墓参(大団円)図である(図七)^①。⑤黯の墓参図というものは、今般(8)、(9)のそれが出現するまで、図七(2)のたった一点のみが知られているに過ぎなかった(表一、表二)。そして、図七が⑤黯の墓参図であろうことは、これもただ推測によらざるを得なかったこと、前述の如くである(上記拙稿Ⅰ)。ところが、この度の(8)、



図七 ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床正面左板右



図八 董黯石床(C)

(9)二図の新たな出現は、そのような研究状況を一変させた。図八は、(8)呉氏蔵董黯石床、正面右板左の⑤黯の墓参(大団円)図を示したものである。そこには黯母の墓(の一部)と、供物を捧げる董黯などが描かれているが、その画面の左寄りには、

董黯^(黯)將^(奇)王寄頭^(奇)祭^(奇)母報酬^(奇)未^(奇)時

という題記が見える(図九)。この題記がまた、極めて重要なもので、その題記の存することによって、図八が⑤黯の墓参図であることが判明し、さらに図八と全く同じ構造を持った図七(2)が、やはり⑤黯の墓参図であったことが確定するからである。図七を⑤黯の墓参図であろうと推論して以来、十五年という歳月を経、その推論の正しかったことが、漸くここに証明されたことになる。研究というものの楽しさが、つくづくと感じさせられる出来事である。

図九 董黯石床(C)題記



ここで、改めて(9)呉氏蔵新出北魏石床、左側板(図三)の右に描かれた、⑤黯の墓参(大団円)図を紹介しておく(図十)。この図十を含む前掲、図三の当石床左側板に描かれた、董黯図三面は、(2)ネルソン・アトキンス美術館蔵北斉石床、正面左板に見える董黯図三面と、三面の構成、構図を殆ど同じくしている点、非常に貴重な資料とすべからざる。取り分け図十の右下、黯の前(左)、墓(塚)の下に描か



図十 呉氏蔵新出北魏石床、董黯(C)

れた三牲の図こそは、当図が一連の董黯図の一部に当たると、⑤黯の墓参(大団円)図に外ならないことを決定付ける、明徴と捉えられよう。図十一は、その三牲図を示したものである。故に、当図を含む、(9)呉氏蔵新出北魏石床の董黯図は、(2)のそれと同等ないし、(2)を超える、学術的価値を有するものと認定される。そもそも(9)は、画風も古様で、おそらく(2)に先立ち、先駆的な位置を占める遺品なのであろう。さて、⑤黯の墓参(大団円)図としての図八(8)と図十(9)とを見較べてみると、董黯——母の墓(塚)——その下の供え物などの構図が、驚く程よく似ていることに気付く。このことは、(8)と(9)とが、深く関連していることの一証だが、面白いことに、墓の下の供え物の中身が違ふ。つまり図九(9)のそれが上述、三牲であるのに対し(図十

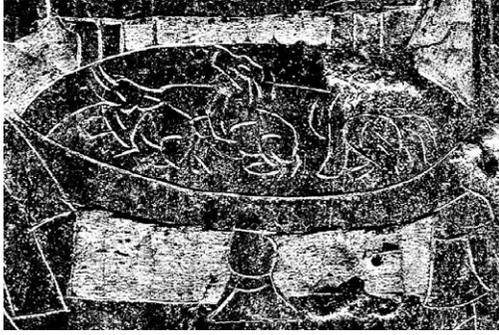
一)、図八のそれは何と、王奇の首となつてゐるのである(図十二)。この図十一(9)と図十二(8)における、供え物の中身の違いは無論、図十二(8)の王奇の首とする方が正しい。何故なら、図十二は、陽明本孝子伝の⑤に、

便至^三奇家^一斫^三奇頭^一、以祭^三母墓^一

とある記述に基づいた前述、図八(8)の題記、

董黯^三將^三王奇頭^一祭^三母報酬^一末時(図九)

によつて描かれたものであることが、明らかだからである。それに対し、本来④三牲強要の場面に描かれている筈のそれが、⑤黯の墓参場面である図十(9)にあることは、どう考えてもおかしい。ならば、図十(9)の三牲図(図十一)は、どのように解釈すべきか、それは、



図十一 三牲(図十左下)



図十二 王奇の首(図八左下)

例えば(4)(5)(6)等に見るような、董黯図における④三牲強要の場面から三牲を移して、本来あるべき王奇の首に代えたものと解釈するのが、妥当と思われる。その三牲は、董黯の物語、図像にあつて、象徴的意味合いの強いもので、董黯図の制作者にとつて、何としても描いておきたい画材の一つであつたに違いない。だから、その三牲は、⑤黯の墓参(大団円)の場面(図十)のみならず、先に触れた(1)(2)の如く、①プロローグの奇の家へも移動して、①の奇の家に③三牲強要の場面をも兼ねさせたのである。例えば三牲のような、象徴的意味合いの強い画材が、幾つかの画面の間を往き来する現象は、今般の(8)、(9)の出現により、初めて確認されるに至つた問題で、今後の孝子伝図研究にとつて是非共、注意を要する事柄と言ふべきである。

(8)董黯石床には実はもう一図、董黯図が描かれている。正面左板、女性墓主像の左の董黯図(B)である(図一参照)。図十三は、(8)の正面左板を示したものである。図十三の(B)は、画面が荒れていて見にくい、画面左下には、右を向いて建つ家が描かれ、その屋内に一人の女性が坐している(右向き)。女性は、右手を上げているようである。家に面した庭上に、一人の男性が跪き(左向き)、両手で食器を捧げている。その男性の前には、三牲を盛つた、長円の盆が据えられる。男性の後ろには、童形の侍者が立ち(左向き)、男性に傘を差し掛けている。その傘は、正面右半の左(図二(C))のそれと同じである。図十三の(B)の画面中には、榜題、題記の類は見当たらない。図十三の左上を見ると、(B)の左に接した別図の一部が残つていて、それも孝子伝図であつたことは間違いないが、残念なことに、図像の殆どを失つて



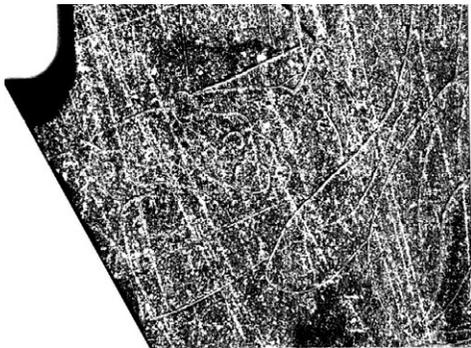
(B)

図十三 董黯石床正面左板

いて、その内容を窺うことは出来ない。図十四は、図十三の(B)を改めて示したものである。ところで、上述図十三の(B)即ち、図十四は、一体何を描いたものか。それは画面の左下に、外ならぬ三牲の図像が見えることから(図十五。左から鶏、羊。左端の豚を欠く。上記拙稿Ⅳの図八参照)、図十三の(B)即ち、図十四は、正面右板(図二)から



図十四 董黯石床(B)



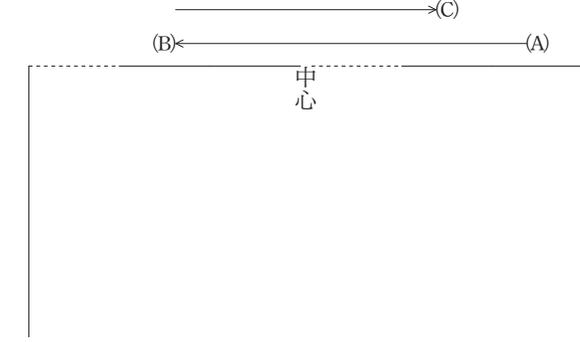
図十五 三牲(図十四左下)

続く、一連の董黯図の一部であり、④三牲強要の場面を描いたものと考えざるを得ない。すると、図十四(董黯(B))は、家が王奇の家、屋内の女性がその母、跪く男性が王奇に比定され、このことから、それは、王奇が母に三牲を強要している場面を描いたものと結論される。加えて、図像を欠いている、図十三の左上に一部分のみを残す、もう一つの孝子伝図も(図一)、董黯図であった可能性が、極めて高いのである。さて、ここで、(8)の董黯石床から見た、董黯図(A)(B)(C)の配列順序を考えてみると、それらは、

(A) — ③ 黯の遠行

(B) — ④ 三牲強要

(C) — ⑤ 黯の墓参(大団円)



図十六 董黯石床における董黯図の配列順序

という順序になるので、(A)は、中心(墓主像)を飛び越えて(B)へと続き、(B)はまた、中心を飛び越えて(C)へと戻ることになる。図十六は、そのことを概念図として示したものである。失われた(B)の左(……線部)も、董黯図である可能性が高く、それはおそらく②黯母暴行の場面などであったと思われる。同様の事象は、(5)の郭巨図においても起きており、(5)の場合は、正面右

板右端の郭巨図(A)が、やはり中心を飛び越えて、正面左板左端の郭巨図(B)へと進んでいた¹³⁾。このことは、従来の孝子伝図配列の捉え方に新たな問題を齎し、その変容、深化に対する考察を必須とするもので、同様の事例の蒐集による、なお今後の検討が俟たれよう。

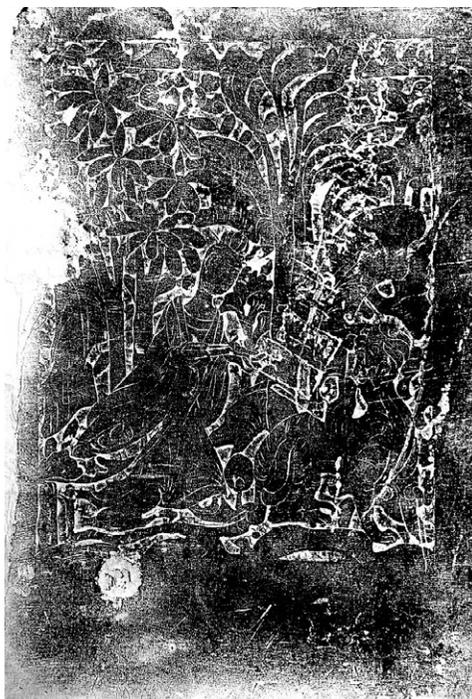
四

さて新出の(8)董黯石床(また、(9))には、まだ幾つかの謎が残される。最後にその一、二を摘記して、小稿の結びとする。

(8)の謎の一つは、前掲図八の⑤黯の墓参(大団円)場面の左端に見える、一頭の虎及び、その上の雷神(の一部)である(図十七)。図十七の雷神図は、惜しくもその画像の大部分を失っているが偶々、図十(9)右上にも雷神が見え、図十七左上に雷神が描かれていたことは、ほぼ確かである。ところが、董黯の物語⑤を閲しても、黯の刑死を嘆く禽鳥の話は出て来るが(船橋本不見。図七(2))には、禽獣の

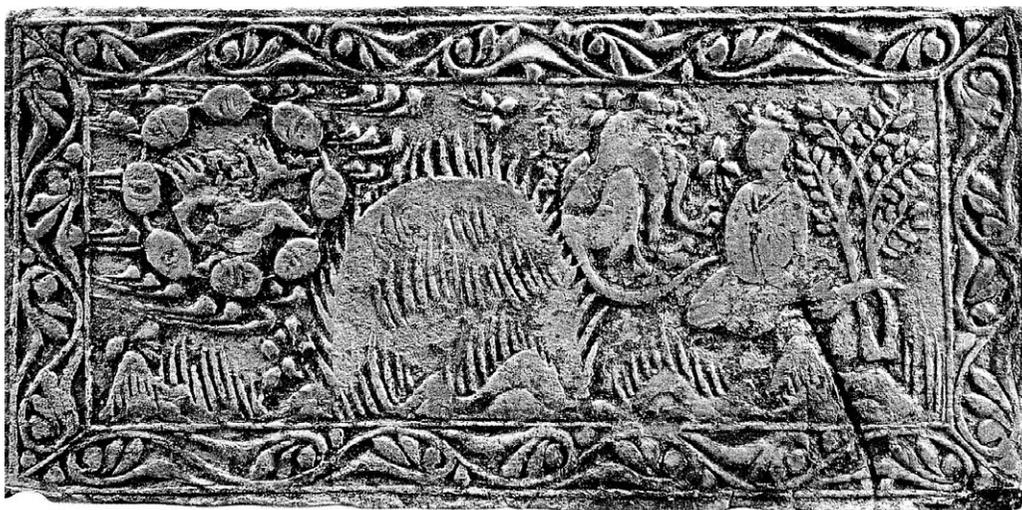


図十七 虎と雷神(C)



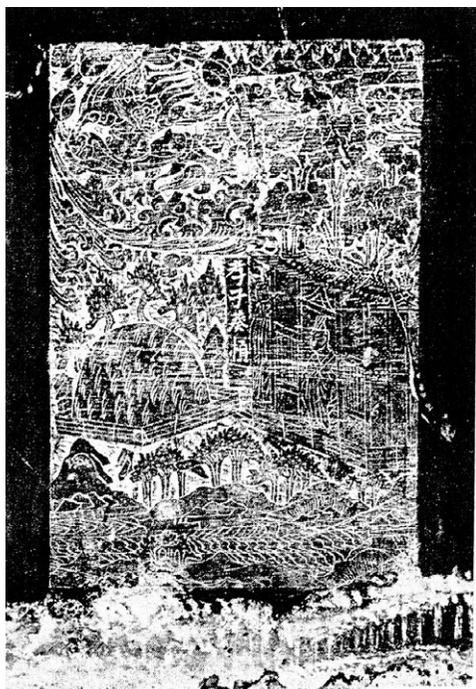
図十八 呉氏蔵北魏石床(三面)左側板左

姿が見える)、虎や雷の話は出て来ない。ならば、図十七の虎や雷神(或いは、図九の雷神)は、一体何を表わすものなのか。ここで想起されるのが、最近呉氏の所蔵に帰した元、北魏石床(二面)の連れの一面に見える、虎のことである。図十八は、その左側面左の蔡順助虎図を示したものである。図十八は、陽明本11蔡順条に記される、非常に珍しい蔡順助虎図であることが、殆ど同時に公表された、襄陽清水溝M1南朝墓画像甁の出現により裏付けられる(図十九)。図十九の画面中央上方には、文字の裏返った「蔡順」という榜題が確認され、図十八は、その右半の図像に相当することが知られるだろう。一方、図十九の墓(塚)を挟んだ左半には、雲に乗る雷神の姿も見える。図十九左は、蔡順畏雷図で、生前に雷を畏れた母の墓(塚)を守る、蔡順の話に基づいている(早く魏、周妻の汝南先賢伝へ説郛五十八所



図十九 襄陽清水溝M1南朝墓画像甁(蔡順)

収」に録され、後漢書三十九、類林（類林雜説一・二）、敦煌本事森などに散見するが、陽明本には見えず、おそらく脱落したものらしい。図十九左に相当する、従来から知られた蔡順畏雷図としては、例えばC. T. Loo 旧藏北魏石床のそれがある（図二十。榜題「孝子蔡順」）。図十八、図十九、図二十の三点は、蔡順助虎、畏雷図として管見に入った全てであり、そこには虎や雷神また、墓（塚）が見える。さて、問題の図十七の虎や雷神（及び、図十（9）の雷神）は、例えば図十八以下の蔡順助虎、畏雷図に確認される所の虎や雷神が、意図的にそこから図十七（また、図十）の⑤黯の墓参（大団円）図へと移し加えられたものと思われる。そのような加工が施された、有力な動機として考えられるのは、図十七（図十）と図十八以下とが、物語的な背景として共有する、母の墓（塚）の存在だろう。即ち、もし図八



図二十 C. T. Loo 旧藏北魏石床（蔡順）

（図十七）や図十の墓（塚）のみに注目するならば、それらは蔡順助虎、畏雷図として眺めることも、十分に可能なのである。

このことから、図八（図十七）や図十は、董黯図⑤に蔡順図（助虎、畏雷）が、言わば重ねられたものと推測されるが、その推測が事実として成り立つためには、孝子伝図において例えば、

（一）場面が重ねられる

（二）シンボル（虎、雷神等）が場面間を移動する

などといった事柄が、実際にあり得るのか、どうかを確認しておく必要がある。まず（一）については、図十九に掲げた、襄陽清水溝M1南朝墓画像甍の蔡順図が、孝子伝図における場面の重なりを示す、貴重な実例となっている。図十九を見ると、前述のように、画面中央の墓（塚）を媒介として、右にその助虎図、左に畏雷図を配し、一つの画面の中に二つの場面を重ね配していることが、実際に確認される¹⁷。次に、（二）は、（一）を目的とする手段、技法の一つという側面を持つ事象だが、例えば同じ董黯図において、そのシンボルとしての三牲が、④から①や⑤の場面へと移動していることは、先に確認した通りである。

図八（図十七）や図十は、かく董黯図（⑤黯の墓参へ大団円）図（図十七）や図十のような孝子伝図は、これまで見たことがない。大変ユニークなものとなるが、一図で二人分の図像を兼ねる、図八（図十七）や図十の図像が蔡順図（助虎、畏雷図）と重ねられ得る、当時の制作現場における情況に関しては、例えば（7）呉氏藏北魏石床（三枚）の図像が、非常に興味深いヒントを与えてくれる。

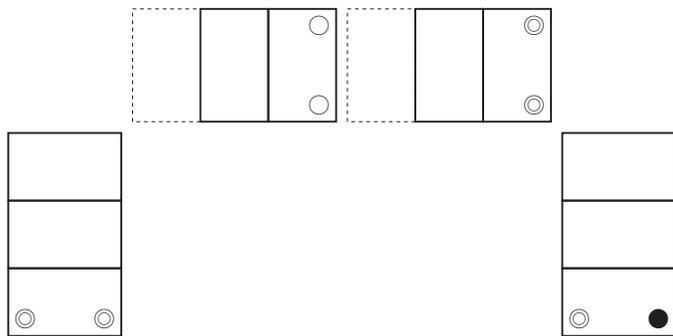
(7)の孝子伝図の描かれ方を見ると、まず右から始まった董黯図(右側板(A)(B)(C)。上記拙稿Ⅲ、図版参照)は、左の蔡順図(左側板左。図十八)へと続いていることが知られる。¹⁸⁾つまり(7)に描かれた孝子伝図の右と左とは、董黯(右)と蔡順(左)の図をそれぞれの冒頭図とし、しかもその董黯図の終わり(C)は、蔡順助虎図(図十八)へと続いていることになる。(7)の孝子伝図配置における、このような董黯、蔡順両図の密接な関連は、例えば図八(図十七)や図十に見える、両図の重なりが実際に生じる状況を、窺わせるに十分なものがある。

さて、図八(図十七)や図十は、それを見る者に対し、基本的に董黯図でありながら、蔡順図でもあることを想起させるという、ポリフォニック且つ、騙し絵の如き効果を持つが、中で、新出(8)の場合、図八(図十七)が董黯図の終わりであると同時に、(8)の孝子伝図の終わりでもあることを考えると(図一、図十六。(9)〈図十〉も同じ)、そのユニークな技法は、四面という画面の数の限られた(8)の孝子伝図制作における、施主に向けられた、画工のサーヴィスなのではないかと思われる。加えて、同じ技法が、これも新出の(9)(図十)に使用されている所を見ると、件の技法は、決して突発的なものでなく、或る程度の空間的、時間的な幅を以って、諸工人間に継承、展開されたものであることが確かである。異なる孝子の、しかも二つ以上の場面を一つの画面に重ねるといふ、(8)、(9)の内に今回見出された技法は、今後の孝子伝図研究にとって、極めて重要な課題であり、さらに大方の検討を必要とする問題と言わなければならない。

新出の董黯石床を一見すると、形式的に不審な点が一、二、目に留

まる。例えば囲屏石板の左右には通常、コの字形の鉤かぎの部分における、石板の重なりを考慮した余白が設けられる。ところが、件の董黯石床には、その余白が見当たらないのである(図版一—図版八参照)。従って、現石板を復元的に立てた場合、鉤の部分二箇所において、石板の厚さ分五厘前後の画面は、見えなくなってしまうことが避けられないであろう。後の截断であろうか。加えて、その石板四枚を、立てた状態で固定するための釘の穴がまた、何とも不思議な位置に穿たれている。図二十一は、現行董黯石

床の囲屏に残された、釘の穴の位置を示したものである(三種類の釘穴の状態を区別した。●は、表裏貫通した釘穴、○は、石板表面にのみ残るそれ、○は、裏面にのみ残るそれを表わす)。図二十一を見ると、まず左右の側板の方に、正面板からの釘を受ける筈の穴のないことが知られる。次いで、左右側板の外側(図二十一で言えば下方)には二つずつ、計四つの釘穴が空けられている。左右側板の下それぞれ(図二十一、右側板の左、左側板の右の◎)は、或いは、左



図二十一 董黯石床の釘穴

右の石闕と連結させるための釘穴とも考えられるが（呉氏教示）、左右側板の上のそれ（図二十一、右側板の右の●、左側板の左の◎）は、繋がる相手がなく、どうにも解釈が不可能である。ひよつとすると、董黯石床は、左右の両側板を取り違えて、釘穴を空けてしまったのではないか。大方の教示を乞いたい。

付記 董黯石床及び、新出北魏石床二点の調査をお許し下さった呉強華氏に対し、心から御礼申し上げたい。また、今回撮影を担当した写真家、立松洋行氏は、気品漂う北魏図像を見事に甦らせてくれた。小稿の原石図像が見易いのは、氏の御蔭である。なお小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環であり、また、平成29年度科学研究費補助金基盤研究(B)による成果の一部である。

〔注〕

- (1) 陽明本孝子伝の引用は、幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15年）に拠る。
- (2) 拙稿Ⅰ「董黯贅語―孝道と復讐―」（拙著『孝子伝図の研究』（汲古書院、平成19年。初出平成14年7月）Ⅱ―3）
- (3) 拙稿Ⅱ「呉強華氏蔵新出北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用―」（『京都語文』24、平成28年12月。小稿の黄盼盼氏による中国語訳「関于深圳博物館展陳北魏石床的孝子伝図―陽明本孝子伝的引用」が、趙超、呉強華氏『永遠の北朝 深圳博物館北朝石刻芸術展』〈文物出版社、二〇一六年〉に収められる。
- (4) 拙稿Ⅲ「董黯図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の孝子伝図について―」（『佛教大学文学部論集』100、平成28年3月）
- (5) 拙稿Ⅳ「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』102、平成29年3月）
- (6) (3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺の董黯図は、内容の解釈が難しい

（注）(4) 前掲拙稿Ⅲの注(12)参照。強いて分類するならば、(1)（黯の家）に入ろうが、暫く表一（表二）からは除外しておく。

- (7) 董黯物語のプロログが、a 貧しい黯の家と豊かな奇の家とは隣り合っており、b 或る時、両家の母同士が対話した、という筋立てであることからすれば（陽明本）、(1)の董黯図が(1)黯の家、奇の家を描き、そこに上記の題記の刻されていることも、(1)プロログの表現としては、誤ってはいない。但し、厳密に見るなら、(1)の図像（即ち、二つの家）と題記（即ち、両母の対話したこと）とは、合致しない。図像には、両母の対話する様子が見当たらないからである。このことから、董黯図のプロログには、両母の対話する場面がもう一場面、存在していたことが予想され、(1)の題記は、そのようなプロログ場面から、(1)の図像に転用されて来た可能性が大きいと考えられる。同様に、(1)の奇の家に三牲が描き込まれていることも(2)も同じ、(1)プロログの場面としてはおかしい。現に新出(9)の図三の中(B)には、三牲は描かれておらず、これが本来の(1)プロログの奇の家である（但し、その三牲が右(図三の右C)の(5)黯の墓参（大団円）場面における、黯母の墓前へと移動していることについては、後述する。だから、(1)のプロログ場面に描き込まれた三牲は、本来は(4)の三牲強要場面にあった筈のものが(4)、(5)、(6)、場面が同じ奇の家を舞台とするものである所から、(4)の場面より(1)の奇の家へと便宜的に移され、ために、(1)、(2)のプロログ場面(1)中に、(4)三牲強要の場面が重ね合わされるといふ、結果を齎すことになったのだろう。一方、(1)、(2)の(1)プロログの奇の家に、(4)の三牲が移動させられていることに関しては、(1)プロログの奇の家の場面に、(4)三牲強要の場面を兼ねさせることにより、石床囲屏一枚に描く、董黯図の図の数を節約する、即ち、減らす効果も、あつたに違いない。それらは、いずれも北魏時代の孝子伝図の工人の工夫に出るものと思われる。
- (8) 図六は、呉氏提供の拓本の写真に拠る。
- (9) 図七は、長廣敏雄氏『六朝時代美術の研究』（美術出版社、昭和44年）図版54に拠る。

(10) 董黯図の諸図における三牲については、上記拙稿Ⅳの二及び、その図八を参照されたい。

(11) 参考までに、船橋本孝子伝の本文を示せば、

黯至_二奇家、以_二其頭_一祭_二母墓_一。

とあり、会稽典録(太平御覧378、482所引)には、

竟殺_二不孝子_一、置_二家前_一以祭

敦煌本事森には、

乃斬_二其頭_一、持祭_二於母_一。

類林雑説には、

刀斬_二寄頭_一、祭_二母墓_一。

と見える。王奇の首が実際に描かれた、図十二(8)の出現から考えれば、例えば図七(2)の図中にも、王奇の首の描かれている可能性が高い。

(12) 注(6)参照。

(13) 注(5)前掲拙稿Ⅳ及び、その図一、図二十三などを参照されたい。

(14) 拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷—吳氏藏北魏石床(二面)の連れの一面の出現—」(関西大学『国文学』101、平成29年3月)参照。図十八は、吳氏提供の拓本写真に拠る。なお陽明本孝子伝11蔡順の本文については、上記拙稿を参照されたい。

(15) 図十九は、襄陽市博物館、襄陽市文物考古研究所、谷城県博物館『天国之享 襄陽南朝画像藝術』(科学出版社、二〇一六年)図版一四五頁所収に拠る。

(16) 図二十は、C. T. Loo & Co, An Exhibition of Chinese Stone Sculptures (New York, 1940) Plate XXX (Catalogue No. 36) に拠る。

(17) 例えば吳氏藏北魏石床脚部や寧夏固原北魏墓漆棺画の郭巨図において、その②道行、④運搬の二場面が、一つの画面に配し重ねられていることは、かつて指摘したことがある(拙稿「郭巨図攷—吳強華氏藏北魏石床脚部の孝子伝図について—」(『佛敎大学文学部論集』98、平成26年3月)。

(18) 注(14)前掲拙稿、図三参照。